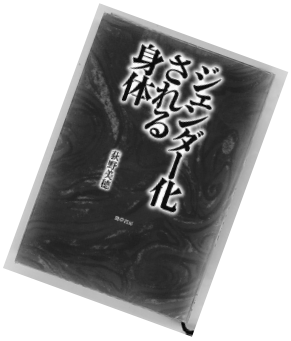
〈一 冊 の 本〉

『ジェンダー化される身体』

荻野美穂（おぎのみほ）著

勁草書房　3,800円＋税



「人は女に生まれない、女になるのだ」シモーヌ・ド・ボーヴォワールの言葉に、初めて出会った頃の私は、「……？」という「女」でした。しかし、その後、女性のアルコール依存症の研究に端を発し、フェミニズムの扉を開けてからは、「そうなのだ！」と納得することばかり。この一冊は、その延長線上で、私が仲間との読書会で出会った一冊です。

男と女を語る時、それは全く異なるものとして、身体が持ち出される。産む性と、そうで無い性の身体は違って当然とされ、そのことから「男と女は違って当然」とばかりにジェンダーが強化されるところの「生物学的決定論」であるが、果たして、男と女の身体はそんなにも異なるだろうか。私はむしろ。目、鼻は勿論、臓器に至っても、同じであることの方が圧倒的に多いと考える。しかし、身体をして、男女の違いが強調されるのは、生れ落ちてからの身体がジェンダー化されていった所以ではないだろうか。

「性によってしるしづけられた身体」＝ジェンダー化された身体。この本の中心的なテーマは、「身体がジェンダー化されるとはどういうことを意味し、それはどのようにして行われたり経験されたりするのか」である。構成は序章に始まり、第１章から第10章までに及ぶ。第３章、第６章では、男性の身体について論じられているが、全体は女性の身体を対象としての論文である。どの章から読み始めても、読者は他の章にも関心が広がり、一気に読破されると思う。あとがきで、著者・荻野美穂が述べているが「1980年代の終わりからあちこちに書いてきたものを一冊の本にまとめた」という、論文集である。

全体が３部に分けられ、第１部ではジェンダー化された身体の歴史を考える際の「思考枠組み」や「方法論」について論述されている。第２部では性差や身体は、当事者や、他者により「客体」としてどのように定義されたか、定義をめぐっての論争、変容を検証している。第３部は、ジェンダーについてのある規範的な文脈のもとで、実際に身体はどのように生きられたか、規範への適応や逸脱はどのようなかたちで起きたかが、事例的研究で論述されている。著者は異性愛体制化の〈女〉の身体に焦点を置き、避妊、堕胎、中絶、子殺しといった「産むことの否定」にこだわり、それらが生起する、政治的状況や権力関係を通しての解釈を行っている。一般に言われる「産む性としての女性」のポジティブな面ではなく、ネガティブな面をあぶりだしている。

少子化社会の現在において「産む性」に対する期待は大きく、反面、子捨て、子殺しの「産む性」への罵声も大きい。しかし、産むことでのもう一方の性に対する声は皆無である。第６章「男の性と生殖」では、「孕ませる性」としての妊娠への責任と同時に、強姦罪や強制わいせつ罪などにならって「強制妊娠罪」や「強制中絶罪」について述べているが、熊本の「こうのとりのゆりかご」の背景に、望まない妊娠・出産で苦しむ多くの女性の存在を思う時、とりわけ印象に残る箇所であった。

（本研究所研究員　赤星香世子
精神保健福祉論）